

山本太郎「ハイチ いのちとの闘い」

富田一雄

国際保健学の研究者として知られる長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授は現場の人でもある。2003年7月から翌04年3月まで、西半球の最貧国、ハイチのカボツ肉腫・日和見感染症研究所でエイズの原因ウイルスであるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）の母子感染防止策などの研究にあたっていた。

「山の向こうは、また山だ」ハイチにはそんなことわざがあるという。試験に次ぐ試験、なぜ食しないのか、どうして悲しい歴史から抜け出すことができないのか。山本さんはそのことを考え、ときには詩立ち、ハイチで生きる人たちから逆に慰められもする。

ハイチ滞在記である本書には「物事がこれ以上、悪くなることはない」という言葉はハイチにはない」とい

### 論説委員「私の1冊」

う米国の新聞記事の一節も紹介されている。04年2月、ハイチをたどった山本さんは内戦と暴動に巻き込まれ、反政府軍がなだれ込んできた首都ポルトープランスで3週間、足止めをくらう。圧巻はその空白の目々の記述だろう。

物事はこれ以上、悪くなりようがないという状態からでもさらに悪化の一途をたどっていく歴史はいまも続いている。今年も年明け早々、大地震に襲われ、日本からも緊急援助隊の医療チームが現地入りした。

テレビのニュースを見たら、何と山本さんがその医療チームの一員として、大きな荷物を抱えながらインタビュに答えているではないか。山の向こうにはきつと希望がある。ハイチへのあふれるよすがな願いが納得できる一冊である。